

## A大学の看護学生が認識した看護学を学ぶことによる 人格形成の要素ときっかけ

鈴木 梨花<sup>1)</sup>, 能見 清子<sup>2)</sup>

### 要 旨

本研究の目的は看護大学生が看護学を学ぶことによる人格形成の要素ときっかけを明らかにすることである。A大学看護大学生285名に質問紙調査を行い、146名の記述内容について質的帰納的に分析した。結果、111名(76.1%)が人格形成できたと回答し、2, 3, 4年生は1年生よりもその割合が高かった。人格形成の要素は【A. 看護師としての自己実現に向けて学ぶ姿勢】と、【B. 他者を大切に、相応しい行動ができる自分への成長】であり、[A-7 自分を見つめる][B-8 他者の立場に立って行動する]等16のサブカテゴリーが抽出された。人格形成の主なきっかけは、演習での《対象者への援助技術を学ぶ》、実習での《看護の対象者との関わり》等であった。看護学を学ぶことにより自己を見つめ、より良い自分に成長でき、他者を大切に、相応しい行動ができる人格が形成され、対象者の援助技術を学ぶことや、実習での経験がそのきっかけになると示唆された。

キーワード：看護学、看護大学生、看護教育、人格形成、経験

### I. 諸言

看護の過程で最も重要なことは、患者と看護師の間の関係を通して如何に患者に満足を与える援助を行なうかにあると述べている<sup>1)</sup>。従って、看護師は、患者と人間関係を築くなかで患者にとっての最善のケアを見出し、技術を持って提供し、生きる力を引き出していくことが使命であるといえる。

より良い看護のためには、豊富な専門的知識や技術だけでなく、相手を思いやり、気づかうなどの看護者の良き人格が必要であることが示唆されている。心を込めた看護は、関わりや技術を通して患者に必ず伝わるからである。ケアには「相手に対して心からの配慮をする」という意味があると述べており<sup>2)</sup>、援助にしても、その動機に相手を思いやる気持ちがあってこそほんとうのたすけとなると述べている。また、看護師に求めるものとして「優しさ、温かさ、思いやり、柔軟性、内省性などを備えた豊かな心（人間性）」と挙げ、それが患者との間によい人間関係を築く基礎となり、その上で、はじめて看護における専門性が生かされるとも述べている<sup>1)</sup>。森ら<sup>3)</sup>は、患者満足度調査を行い、患者が入院中に良かったと思うことで最も多かったのは、「看護師の対応・

態度」であり、136件中50件と示している。「きちんとした挨拶」「ナースコールへの適切な対応」「私語を慎み不用意な言動しない配慮」の3項目に対し、「そうである」と感じる割合が80%を超え、いずれも看護師の対応、態度に満足を示していた。このことから、看護師の適切な態度が患者の満足につながっており、それには看護師一人一人が持つ人間性が根底にあるのではないかと考える。また、文部科学省<sup>4)</sup>は、看護系人材として求められる資質のひとつとして、コミュニケーション能力を挙げ、その中で、豊かな人間性や多種多様な人々を尊重した態度で支援できる人材を求めている。

このように、看護における人格形成とは、患者の満足につながるなどの質の高い看護を提供するために、モラルやあらゆる物事のとらえ方、価値観や人間性を整えていくことであり、看護師として求められる資質に近づいていく過程であると考えられる。患者へのより良いケアのために、社会全体としても看護師はよき人格者であることが求められ、看護師としての人格を培っていく必要がある。

「教育は人格の完成を目指す」と教育基本法にあるように、教育の目的の一つに人格の形成がある。Erikson, E.の青年期における自我同一性の確立という重要な発達課題に直面する時期にある看護大学生にとって、看護教育は専門知識や技術の習得のみならず、人格形成においても重要な役割を果たしている<sup>5)</sup>ことから、看護教育は人格形成に大きく影響すると考えられる。

1) Rika Suzuki

元創価大学看護学部

2) Kiyoko Nohmi

創価大学看護学部

先行研究では、看護教育に含まれる臨地実習において、社会的スキルや思いやりといった人格の形成に関する研究が行われている。領域別臨地実習を履修した看護大学生3・4年生全員が、実習によって人間としてかなりあるいは少し成長したと回答していたと述べており<sup>6)</sup>、看護学を学ぶことによって人格が形成されることを示唆している。また、人格形成の要素として、思いやり行動の発達について調査し、1年次より3年次で看護における思いやり行動が発達したと述べている<sup>7)</sup>。そして、学習進度に伴う科目履修や学習方法や学内演習、臨地実習は、思いやり行動に影響を与えるきっかけであることを明らかにしている。また、看護大学生の社会的スキルは学年が上がるごとに上昇することを示している<sup>8)</sup>。このことから、看護を学ぶことによって、専門的知識を習得できるだけでなく、社会的スキルや思いやり、共感性が向上していることから、看護学を学ぶことが、看護学生の人格形成により良い影響を与えていることが示唆される。しかし、看護学を学ぶことによる人格形成の要素における研究は、思いやりや社会的スキルなど限定的であり、明らかにされている人格形成の要素は少ない。また、具体的な看護教育、看護大学生生活のどのような場面やきっかけによって人格が形成されるかは十分明らかにされていない。そのため、看護大学生が看護学を学ぶなかで認識した人格形成の要素と具体的なきっかけを明らかにし、看護学における新しい価値を見出したいと考えた。

## II. 用語の定義

人格形成：知能、思考から感情、性格まで、人間の心の全ての側面を統合したもの。(例えば、その人が現在まで備え持っている性格やモラル、能力(スキル)、あらゆる物事のとらえ方、価値観や人間性が看護師において求められる資質に形作られていくこと。)

きっかけ：自分の人格を形成できたと本人が認識している機会や手がかり、動機や成り行き。授業の科目も含む。

看護学を学ぶこと：看護大学生として授業や臨地実習、自己学習や看護研究など、看護を学び合う組織の中での日々の学生生活。ただし、部活動やサークル、他の課外活動は含めない。

## III. 研究方法

### 1. 研究対象者

A大学看護学部にて在籍する看護学部生1年生から4年生の約320人を対象とした。

## 2. データ収集方法

看護大学生285名に授業終了後等に研究説明を行い、質問紙を配布した。授業終了直後の回答は誘導せず、学部棟内の鍵付回収箱にて回収した。質問内容は、学年および、「看護大学生生活において人格形成できたか」に対し、「かなりできた」「少しできた」「変わらない」「あまりできなかった」「全くできなかった」「できているのかわからない」の6段階から質問した。「かなりできた」「少しできた」に回答した学生を対象に、看護大学生生活の中のどの場面やきっかけで人格形成できたと認識したかを質問した。看護学大辞典を参考に、看護大学生生活は「講義」「演習」「実習」「学生生活」の4つに大別されると考え、これら4つの箇所にあてはまる場面やきっかけを自由に記述してもらった。各学年の質問紙の回答期間は2018年6月から7月とした。

## 3. データ分析方法

1) 学年と人格形成の認識については、記述統計を算出した。看護大学生生活において人格形成できたかについては、「6. かなりできた」「5. 少しできた」「4. 変わらない」「3. あまりできなかった」「2. 全くできなかった」「1. できているのかわからない」と得点化した。統計的解析ソフトは、Microsoft® Excel® 2013を使用した。

2) 自由記述内容を質的帰納的に分析した。

### (1) 人格形成の要素の分析

記述データを熟読し、「人格形成された場面や学びのきっかけ」とそれによる「認識と行動」にデータを分類した。看護大学生生活全体としてどのような人格形成がなされるのかに着目し、データを抽出した。抽出したデータの意味を要約し、コード化、サブカテゴリー・カテゴリー化した。さらに、サブカテゴリー間の関係性を確認し、ERIC(国際理解教育センター)が提示している、人権尊重行動へ至る三段階“3As”を人格形成の段階の目安として採用し、「意識する」、「態度が変わる」、「行動が変わる」という順に並べた。

### (2) きっかけの分析

記述データより、人格形成された場面や学びのきっかけに焦点を当て、抽出したデータの意味を要約し、コード化した。学びやきっかけの内容を、A大学看護学部のホームページの履修モデル及びシラバスを参考にし、専門分野・科目等に置き換えた。看護大学生生活における人格形成のきっかけを4つの分類(講義、演習、実習、学生生活)ごとに整理し、主にどのよう

なきっかけが人格形成に影響しているのかに焦点を当て、抜粋したきっかけと記述された科目を、それぞれ多いものから順に示し、分析した。

いずれも、質的研究の実績を有するスーパーバイズを得てデータ分析の妥当性を確保した。

#### 4. 倫理的配慮

本研究はA大学看護学部生倫理審査会の審査を受け、承認を得て行った(承認番号:2018-006)。授業終了後に、調査の説明と調査用紙を配布した。対象者に、研究の主旨、自由意志の参加、個人情報保護、データの取り扱い、途中辞退の保障、調査結果の公表方法を文書及び口頭で説明した。授業終了後の回答ではなく、自由な時間での回答を促した。

### IV. 研究結果

#### 1. 研究協力者の概要

質問紙の配布数は学部全体で合計285部、回収数は146部(回収率51.2%)であった。学年別の回収率は、1年生が46.2%、2年生が52.5%、3年生が54.1%、4年生が52.7%であった。

#### 2. 学部全体における人格形成への認識

看護大学生生活における人格形成の認識について、回収された146名のうち学部全体で「かなりできた」が全体の24.7%となり、「少しできた」が51.4%であった。「かなりできた」「少しできた」の合計は全体の76.1%であった。

#### 3. 学年ごとにおける人格形成への認識

2, 3, 4年生において、「6. かなりできた」「5. 少しできた」と回答する学生が8割以上を占めたが、1年生は半数程度であった(表1)。

表1 看護大学生生活において人格形成できたと認識した各学年の人数と割合

学年 (n)	6.かなりできた	5.少しできた	4.変わらない	3.あまりできなかった	2.できなかった	1.できているかわからない
4年生 (38)	9 (23.7%)	27 (71.1%)	2 (5.3%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)
3年生 (40)	15 (37.5%)	17 (42.5%)	5 (12.5%)	2 (5.0%)	0 (0.0%)	1 (2.5%)
2年生 (32)	11 (34.4%)	14 (43.8%)	6 (18.8%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	1 (3.1%)
1年生 (36)	1 (2.8%)	17 (47.2%)	16 (44.4%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	2 (5.6%)

#### 4. 看護学を学ぶことによる人格形成の要素

看護学を学ぶことによる人格形成の要素を表2に示す。看護学を学ぶことによる人格形成の要素は全部で63コード抽出され、16サブカテゴリー、2カテゴリーに分類された。

以下、本文中カテゴリーは【】で、コードは〔〕で示す。

カテゴリーは、【A. 看護師としての自己実現に向けて学ぶ姿勢】と、【B. 他者を大切に、相応しい行動ができる自分への成長】の2つに分類された。

#### 1) 【A. 看護師としての自己実現に向けて学ぶ姿勢】

看護大学生生活での実習などのきっかけによって自己を見つめ、自分の中の価値観や捉え方が変わるなどして、自己成長に繋がるとされる人格が形成できたことと意味づけした。この中には、8つのサブカテゴリーが包含された。

- (1) [A-1 新しい考えや知識を得る] は、今まで自分が知り得なかったものを知ることが出来た状態であり、“考え方や知識を得られた”“看護師として求められる力について知った”“視野が広がった”の3つのコードが挙げられた。
- (2) [A-2 看護の素晴らしさを実感する] は、学びを通して、看護に対する深い味わい、本当の楽しさを知ることが出来るようになった状態であり、“看護の尊さを感じた”“誰かのために動ける素晴らしさを実感した”“患者から力をもらった”“人間の生命力や可能性を感じた”の4つのコードが挙げられた。
- (3) [A-3 自分を見つめる] は、言動や価値観を振り返り、内省し、自己理解や改善をしようと試みることができるようになった状態であり、“自己理解が出来た”“自分を見つめなおした”“自分の悪いところを改善しようと意識するようになった”の3つのコードが挙げられた。
- (4) [A-4 感謝の心を抱く] は、知り得た知識や状況を自分の身に置き換えた時にいかに自分が恵まれていたかに気づいてありがたさを抱いた状態であり、“将来患者に向き合えることにありがたさを感じた”“自分が健康である事への感謝が湧いた”“自分の人生を幸せに思えるようになった”の3つのコードが挙げられた。
- (5) [A-5 自分の価値観を形成する] は、得た知識や価値観を自分の中に取り入れ、自分の価値観をより良いものに変えることが出来た状態であり、“看護観が深まった”“価値観を形成できた”の2つのコードが挙げられた。
- (6) [A-6 物事へのとらえ方が変わる] は、ある事象に対する自分の視点や受けとめ方が変わったこ

表2 看護学生生活における人格形成の要素

カテゴリー	サブカテゴリー	コード抜粋	人権尊重行動段階	コード数
A. 看護師としての自己実現に向けて学ぶ姿勢	A-1 新しい考えや知識を得る	考え方や知識を得られた／看護師として求められる力について知った／視野が広がった	意識化する	3
	A-2 看護の素晴らしさを実感する	看護の尊さを感じた／誰かのために動ける素晴らしさを実感した／患者から力をもたらした／人間の生命力や可能性を感じた	態度姿勢が変わる	4
	A-3 自分を見つめる	自己理解が出来た／自分を見つめなおした／自分の悪いところを改善しようと意識するようになった		3
	A-4 感謝の心を抱く	将来患者に向き合えることにありがたさを感じた／自分が健康である事への感謝が湧いた／自分の人生を幸せに思えるようになった		3
	A-5 自分の価値観を形成する	看護観が深まった／価値観を形成できた		2
	A-6 物事へのとらえ方が変わる	多面的に捉えられるようになった／物事に意味を見出すことが出来た／物事を客観的に見る事が出来た	3	
	A-7 目標に向けて学びを深めたいという思い	看護師になる事への実感がわいた／患者のために看護できるようになりたいと思った／理想の看護師像を見つけた／根拠に基づいて行動しようと思った／やる気が出てきた／積極的に学ぼうと思った／将来に活かしたいと思った	7	
	A-8 日常で看護の学びを活かす	看護の概念が生活に活かされた／考え方や発言が医療者に近づいた／先々を考えて行動するようになった	行動変容	3
B. 他者を大切に、相応しい行動ができる自分への成長	B-1 思いやりの心が強まり配慮を意識する	プライバシー等患者への配慮が出来るようになった／声掛けなどの気配りを意識できるようになった／思いやりの心が強まった／心を込めてケアしたいと思った	意識化する	4
	B-2 他者の価値観を受け止める	異なる意見も否定せず受け入れる姿勢が身に付いた／あらゆる生き方や考え方を認められるようになった／その人の特性を感じることが出来た	態度姿勢が変わる	3
	B-3 他者の気持ちに寄り添う	もっと患者に寄り添いたいと思えるようになった／相手の気持ちを理解しようと努めた		2
	B-4 他者を尊重した態度を意識する	相手を尊重して接することが出来た／人権について考えるようになった／生命への敬意を忘れずに行動できるようになった／優しくしたり話を聞こうと思った／友人を大切にしようと思った		5
	B-5 他者理解をする	相手の気持ちや考えを理解することが出来た／不安な気持ちに気づくことが出来た		2
	B-6 他者への関わり方の変化	人と関わることに能動的になった／コミュニケーション能力が上がった／傾聴を意識するようになった／思いを引き出す接し方を学んだ／明るくなった／暴言が減った／人とかかわりに対して自分が成長できた／タッチングが出来るようになった／心を開けるようになった	行動変容	10
	B-7 助け合う心を持ち行動する	他者と協力する大切さに気付いた／共ががんばることの重要性を知った／仲間と支え合うことの大切さを学んだ／苦楽を分かち合える友人がいることに幸せを感じた／励まし合えることが出来た		5
	B-8 他者の立場に立って行動する	相手の状況に対する関わり方を考えることが出来た／相手の立場を考えて行動できるようになった／個性を考えられるようになった／相手の求めている事を考えて行動できた		4

とで、以前と違った意味付けや判断が出来るようになった状態であり、“多面的に捉えられるようになった”“物事に意味を見出すことが出来た”“物事を客観的に見る事が出来た”の3つのコードが挙げられた。

- (7) [A-7 目標に向けて学びを深めたいという思い] は、看護の学びによって、なりたいた看護師像や将来の目標が見つかり研鑽しようとする意欲が高まった状態であり、“患者のために看護できるようになりたいと思った”“積極的に学ぼうと思った”“将来に活かしたいと思った”など7つのコードが挙げられた。
- (8) [A-8 日常で看護の学びを活かす] は、看護での学びが自分の生活の質の向上のために活用しようとしているまたはできている状態であり、“看護の概念が生活に活かされた”“考え方や発言が医療者に近づいた”“先々を考えて行動するようになった”の3つのコードが挙げられた。

## 2) [B. 他者を大切に、相応しい行動ができる自分への成長]

看護学生生活での実習などのきっかけから、患者をはじめとする他者に対して関心を持ち、他者のためになるような働きかけが出来る人格が形成できたことと意味づけした。8つのサブカテゴリーが包含された。

- (1) [B-1 思いやりの心が強まり配慮を意識する] は、他者のために思いやり、不都合や不利益が無いように気遣う気持ちが以前より強まった状態であり、“プライバシー等患者への配慮が出来るようになった”“声掛けなどの気配りを意識できるようになった”“思いやりの心が強まった”“心を込めてケアしたいと思った”の4つのコードが挙げられた。
- (2) [B-2 他者の価値観を受け止める] は、たとえ自分と考え方が異なっても否定せずにその人の考え方として承認できるようになった状態であり、“異なる意見も否定せず受け入れる姿勢が身に付いた”“あらゆる生き方や考え方を認められるようになった”“その人の特性を感じる事が出来た”の3つのコードが挙げられた。
- (3) [B-3 他者の気持ちに寄り添う] は、対象の気持ちなどに共感しようとする姿勢を持てるようになった状態であり、“もっと患者に寄り添いたいと思えるようになった”“相手の気持ちを理解し

ようと努めた”の2つのコードが挙げられた。

- (4) [B-4 他者を尊重した態度を意識する] は、対象の存在や言動を尊いものとして重んじて敬う行為をするようになった状態であり、“相手を尊重して接することが出来た”“友人を大切にしようと思った”などの5つのコードが挙げられた。
- (5) [B-5 他者理解をする] は、対象の状況や気持ちを少しでも共感したり理解できるようになった状態であり、“相手の気持ちや考えを理解することが出来た”“不安な気持ちに気づくことが出来た”の2つのコードが挙げられた。
- (6) [B-6 他者への関わり方の変化] は、他者との関わりがより良くなるように自身の直接的な言動や振る舞いを変えていくことが出来た状態であり、“人と関わることに能動的になった”“コミュニケーション能力が上がった”“明るくなった”など10個のコードが挙げられた。
- (7) [B-7 助け合う心を持ち行動する] は、ある目的のために他者と心を共にし、鼓舞し合い、力を合わせて努力する姿勢が身に付いた状態であり、“他者と協力する大切さに気付いた”“共にがんばることの重要性を知った”など5つのコードが挙げられた。
- (8) [B-8 他者の立場に立って行動する] は、対象の気持ちや状況を考えたうえで自分の行動をどうすべきか判断し行動できるようになった状態であり、“相手の立場を考えて行動できるようになった”“相手の求めている事を考えて行動できた”など4つのコードが挙げられた。

## 5. 人格形成のきっかけ

看護大学生生活における人格形成のきっかけを4つの分類（講義、演習、実習、学生生活）ごとに整理し、記述の多かったきっかけを抜粋し、表3に示した。

最も記述が多かった分類は演習であり、84の記述があった。その中でも《対象者への援助技術を学ぶ》きっかけが最多であった。次に、講義が多く、78の記述があった。《看護の対象者の特徴を知る》などのきっかけが挙げられた。次に実習となり、76の記述があった。《看護の対象者との関わり》というきっかけが多く挙げられた。

## V. 考察

### 1. 人格形成の認識

結果より、大多数の看護大学生が、看護大学生生活によって人格形成できたと認識していた。先行研究におけ

表3 人格形成のきっかけ

分類	データ数	きっかけ抜粋	記述のあった専門分野・科目等
講義	78	看護の対象者の特徴を知る, 看護の概念を学ぶ, 看護の対象者との関わり方を学ぶ, 看護師の態度を学ぶ, 教員らの体験を聞く, 対象者を知る, 自分のキャリアビジョンを考える など	看護学概論, 看護理論, 人間関係とコミュニケーション, 健康と生活, キャリアプランニング基礎, 成人看護学, 小児看護学, 老年看護学, 成人看護学慢性期援助論, 精神看護学, 母性看護学, 心理学,
演習	84	対象者への援助技術を学ぶ, 看護の対象者を体験する, グループワークを通して学び合う, 事例でケアを検討する など	生活援助技術, 臨床看護技術, 看護過程, 小児看護援助論,
実習	76	看護の対象者との関わり, 先生からの指導, 現場の看護師を見る, 困難な体験をする, 学生間で学び合う など	基礎看護学実習Ⅰ, 基礎看護学実習Ⅱ, 成人看護学慢性期実習, 成人看護学急性期実習,
学生生活	13	看護大学生生活	

注)空欄は該当なしとみなす

る内容と大筋一致しており、看護学を学ぶことによって人格形成されることが示唆された。2年生と3年生と4年生が、1年生よりも人格形成できたと認識した割合が高い理由の一つには学習経験の差が考えられる。齋藤ら<sup>9)</sup>の思いやり行動における研究では、学年が上がることで看護における思いやり行動が有意に発達したと述べ、この要因として専門知識の習得の積み重ねや、実習を通じた教育の効果によるものと考察している。また、1年生に質問紙を配布したのは、入学して約3か月経った頃であり、大学生活という新しい環境で生活し、看護学を学ぶことで新たな知識や視点を増やし始める時期である。そのため、すぐに自分の態度を変え行動まで変容できたり、自分の人格形成を実感したり、またそれが看護学によるものなのかを自覚することはまだ難しい。2年生以降になると、看護の専門分野の科目を学習する機会が増え、実習も行なうなど臨場感のある経験が増える。人格形成の最も多かったきっかけが演習での《対象者への援助技術を学ぶ》であり、他学年と比べこの時期の1年生は対象者への援助技術を学ぶ機会は少ない。次に多かった講義においても、該当した科目で多かったものは成人看護学など、2年生から履修する専門科目が多く見受けられた。このことから、経験の豊富さや人格形成のきっかけとなる機会の違いから、1年生と他学年の間に人格形成への認識の差が生じたと考えられる。看護学を学ぶ経験は人格形成へのきっかけを与え、学生の人格形成の認識も高めると考える。

## 2. 看護学を学ぶことによる人格形成の要素

看護学を学ぶことによる人格形成の要素のカテゴリーは大きく2つに分類された。看護学を学ぶことによって

自分を見つめ、新たな自分を見出し、他者のために行動できる自分へと成長できることが明らかになった。この自己と他者の関係性として、森<sup>10)</sup>は対象を理解するプロセスについて示し、他者に興味関心を抱くことで改めて自己への関心が生じると述べている。そして、自己と対峙した結果、自己理解が深まると述べており、自己理解と他者理解に相互性がみられることを明らかにしている。看護の対象は、患者という他者であり、向けられる関心が他者から始まる。看護学を学ぶことによる人格形成は、他者へ向き合うことから始まり、[新しい考えや知識を得]たり、[看護の素晴らしさを実感]するといった新たな気づきやスキルを習得する。そこから、関心を自分の方に引き寄せた時に、客観的あるいは多面的に[自分を見つめる]ことが出来るようになる。自分を見つめることで自己理解を深め、[感謝の心を抱く]ようになり、[自分の価値観を形成]でき、[物事へのとらえ方が変わり]、[目標に向けて学びを深めたい]と思うなど、自己の内側から新たな価値観や感情などが湧き出でる。そうした価値観や感情は[日常で看護の学びを活か]せるという自己実現への行動変容に繋がっていく。また、自己との対峙によって生まれた価値観や感情などは、再び他者にも向けられるようになる。[思いやりの心が強まり配慮を意識]でき、[他者の価値観を受け止め]られるようになり、[他者の気持ちに寄り添]い、[他者を尊重した態度を意識]できるようになるという態度姿勢がこれに値する。そして、実際にそれらが行動としてあらわれてくると、[他者理解]が出来るようになり、[他者への関わり方の変化]が生まれ、[助け合う心を持ち行動]し、[他者の立場に立って行動]できるようになるというように行動化できた自己を認識する。この自

己と他者との相互作用によって、より良い自分へと成長させ、他者を大切にするという人格を形成していくことが考えられる。

### 3. 人格形成できたきっかけ

人格形成が行われるきっかけは、主に演習での《対象者への援助技術を学ぶ》、実習での《看護の対象者との関わり》というきっかけによって人格形成できたと認識をしていた。学びの「経験をする」ことが、看護大学生の人格形成に影響を与えていると考えられた。太田<sup>11)</sup>はPolanyiの文献を用いて、「知的に知る」ことと、「実践的に知る」ことの2つが存在して「知る」とし、看護学教育は「経験」を通して学びになるという事を説明しており、看護学教育の在り方の中で、看護学生の人格形成の重要性をも述べている。松尾<sup>12)</sup>は、経験とは人間と外部環境との相互作用と定義しており、経験から学び成長することの重要性を提唱している。伊藤<sup>13)</sup>は、経験学習の一つである体験学習は、実感が強く働き、情動と認知がともにかかわることから興味や関心を刺激し、学習の定着度は高く、他方では個性の気づきを容易にし、その発動を促す可能性が大きいと述べている。つまり経験は、目の前で生じている現象を自己に実感させ、自己を刺激し何らかのインパクトを与えやすくする作用があると考えられ、それによって自己を見つめ意味を見出し、自己理解と他者理解をもたらす。そして、自己と他者への関心を統合させるとき、人間として成長することが出来る<sup>12)</sup>。経験をするとということは人格形成をより促進させるものであることが考えられた。したがって、人格形成のきっかけには、《対象者への援助技術を学ぶ》、《看護の対象者との関わり》、といった、「経験をする」ことが上位に挙げられたと考えられる。

## VI. 結論

1. 学部全体の76.1%が看護学を学んだことで人格形成できたと認識していた。看護学を学んだことで人格形成できたと認識していた点で、看護大学生2、3、4年生が1年生よりも割合が高かった。
2. 看護学を学ぶことによる人格形成の要素は【A. 看護師としての自己実現に向けて学ぶ姿勢】と、【B. 他者を大切に、相応しい行動ができる自分への成長】であった。
3. 人格形成の主なきっかけは、演習、講義、実習であり、《対象者への援助技術を学ぶ》、《看護の対象者との関わり》というきっかけが多く挙げられた。

## 謝辞

本研究に快く承諾し、ご協力いただきました皆様に心より御礼申し上げます。

## 文献

- 1) 神郡博：看護に求められる人間性，弘前学院大学看護紀要，1，1-6，2006.
- 2) 長谷川隆：人間関係論，医学書院，15，2004.
- 3) 森仁実，小野幸子，グレッグ美鈴他：患者満足度調査からみたA病院における看護サービスのあり方，岐阜県立看護大学紀要，6，1，2005.
- 4) 文部科学省2017：看護学教育モデル・コア・カリキュラム，[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chousa/koutou/078/gaiyou/\\_icsFiles/afeldfile/2017/10/31/1397885\\_1.pdf](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/koutou/078/gaiyou/_icsFiles/afeldfile/2017/10/31/1397885_1.pdf)，2018年11月2日.
- 5) 澤村律子，寺嶋繁典，橋本豊子他：看護大学生の樹木画—看護教育と人格形成について—，大阪医科大学付属病院看護専門学校紀要，3，10-15，1996.
- 6) 武田かおり，鉢呂美幸，工藤恭子：看護大学生の社会的スキルに関連する生活及び実習体験，名寄市立大学道北地域研究所年報，30，21-27.
- 7) 鈴木ヒロ子，齋藤チエ子，渡辺敦子他：看護学生の看護における思いやり行動の発達，日本看護協会出版会，30，56-58，1999.
- 8) 加藤葉，沢佳夏子，下瀬寛子他：看護学生の社会的スキルと共感性の学年間比較に関する検討，米子医誌 J Yonago Med Ass，64，78-86，2013.
- 9) 齋藤チエ子：看護における思いやり行動の発達—看護教育の効果—，北海道東北地区看護研究学会集録，FY11，119-120，1999.
- 10) 森真喜子：精神看護学実習における人間理解のプロセスに関する研究，日本看護科学学会学術集会講演集，32，549，2012.
- 11) 太田美緒，前田樹海：文献に見るわが国の看護教育におけるロールモデルの概念，長野県看護大学紀要，11，51-61，2009.
- 12) 松尾睦：経験からの学習—プロフェッショナルへの成長プロセス—，同文館出版株式会社，p10，p188，2012.
- 13) 伊藤俊夫：学校と地域の教育力を結ぶ，全日本社会教育連合会，p6，2001.